



ユカラの多くは、空を駆け、地を潜りと、超人的な能力をもつた少年が大暴れして活躍する話が多く、戦いや恋愛などの体験談がいっぱい。同じ話でも語り手によっては得意なシーンが長くなったり、嫌いなシーンは端折ったりとさまざまに語られるのも特徴で、血を流し、肉を切り、骨を砕き、斬られても斬られても戦い続けるというようなシーンが事細かく語られることも。

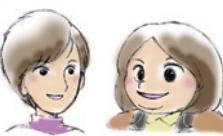
ユカラ(英雄叙事詩)



アイヌの物語全部をユカラと呼ぶと勘違いをしている人って結構いるよね。アイヌの物語は、語り方や登場人物などによって幾つかのジャンルに分かれています。ユカラもその中のひとつ。叙事詩や英雄叙事詩と訳される話で、地域によってはサコロペやハウキとも呼ばれる。アイヌの物語の中でも娛樂性があつて、長い話が多く、語るのに数時間かかるものから、三日三晩語つても終わらないものもあったとか?

レプニ(拍子木)で拍子をとり、節をつけて語うように語られる。自分の節で語るのも当たり前。聞き手もレプニで拍子をとったり、話の合間に「ヘツ! ホツ!」とヘツチエ(離すや)

ゆうことみゆきのふくふくトーク ソンコ de ソンコ



Vol.28

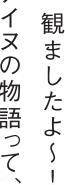
アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた本田優子(札幌大学副学長)と村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、その魅力をソンコ(=お便り)形式で語り合います。

イラスト／安田千夏



優子さん、戦うシーンといえばアイヌ文化

振興・研究推進機構が制作したユカラのアニメ版、観ました? 十分程度と短いけど、戦闘シーンの迫力ある刀さばきや、超人的な身のこなしも必見。アイヌ語のセリフ回しも、ユカラを聞くのとは違う感覚で新鮮だよ。



観ましたよ!

アイヌの物語って、

伝統的には文字に頼らず口伝えが基本。語りのパワーと面白さが大切にされてきたんだけど、現在は文字で表した文学として触れる機会が多いよね。でも、やっぱりそれじゃ伝わらないところがいっぱいあるから、その点、アニメってとてもいい!



英雄叙事詩の主人公
ポイヤウンペ
(イメージ)

ある意味、「スーパーマン」が主人公のユカラは、特にアニメ向き。登場人物も美少年・美女少女だしね(笑)。でも、アニメ化されたのはまだほんの数話。当面は、書かれたもので楽しむしかないかな。

日本語に翻訳されているユカラで代表的なのは、金成マツさんというアイヌのおばあさんが書き残し、北海道教育委員会が毎年刊行してきた、俗称『ユーカラシリーズ』ですね。販売されてるわけじゃないので、興味のある方は図書館でどうぞ。

金成マツさんは、「アイヌ神謡集」で有名な知里幸恵さんや、その弟で北海道大学の教授だった知里真志保博士の伯母さんにあたります。姪の幸恵さんが亡くなつてから、五十二歳でユカラを筆録し始め、アイヌ文学研究者の金田一京助先生や甥の真志保博士に残したの。流麗なローマ字でびっしり書き込まれた約二万ページ分の大

学ノートは、まさに人類の宝。ところで、かつては人が亡くなつた時、死者の枕元でユカラを語つてあげたんですね。その時は、必ず最後まで語り終える約束。だつて、おもしろいところでやめたりしたら、「続きをどうなつたら?」って出てきちゃうから。つまり、お化けが出るほど面白いお話:それがユカラってことだよね。

J

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学副学長。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。

■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族博物館専務理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。

■安田千夏(やすだちか):神戸市生まれ。元アイヌ民族博物館学芸員。現在は同館でアイヌ若手育成事業の自然講座講師を務める。